

青年期における運動部活動経験

－生涯発達の視点からの検討－

上野 耕平

Experiences in Athletic Clubs in Adolescence

－Discussions from a Perspective of Life-Span Development－

Kohei Ueno

Abstract

A number of studies on the relationship between sports participation and personality development have been conducted. However, there are few studies which discussed it from the perspective of life-span development. Variable selection which is appropriate to one's psychosocial developmental stage is needed to understand the meaning of the experiences in athletic clubs in one's lifecycle. This study focused on the life skills as variables to understand it for junior and senior high school students. Life skills are abilities which are needed to carve a life for oneself. The acquisition of life skills through the participation in athletic clubs reflects the educational guideline. Athletic clubs which focus on the acquisition of life skills will create opportunities for the participants to choose the future path and clarify the place of athletic clubs in school education.

Key words : life skills, lifecycle, youth, zest for living, sports

はじめに

運動部活動は生徒の人間の成長を導く活動であるとして、社会から積極的な期待を受けてきた。そしてこの期待を支えてきたのは、選手として、また、保護者や指導者として、運動部活動に携わった関係者による経験的な事実である。しかし、体育・スポーツ心理学領域における先行

研究は、運動部活動に主体的に取り組む生徒の生涯発達において、そこでの経験が果たす役割について、未だ十分に明らかにしていない。運動部活動におけるどのような経験が、生徒の生涯発達においていかなる役割を果たすのか。生徒の発達段階を考慮した上で、ライフサイクルの視点から、そこでの経験の在り方について検討する必要がある。

そこで本研究では、まず運動部活動の教育的意義や問題点に言及した資料から、現在の運動部活動が置かれている状況について把握する。次に、これまで体育・スポーツ心理学領域で行われてきた研究成果に基づき、生涯発達の視点から運動部活動における経験の在り方を探る研究の必要性を示す。また、青年前期として位置づけられる、中学・高校における運動部活動を研究対象とするにあたり、研究上の変数としてライフスキルに注目することを説明する。そして、ライフスキルの獲得に注目した運動部活動は、指導者による適切な指導のもと生徒主体の活動が実施されることにより、生徒が自らの人生を選び取っていく際の手がかりを与える活動となることを示すと共に、生きる力の育成を標榜する現在の学校教育において、運動部活動の位置づけの明確化に寄与することを説明する。

1. 運動部活動の教育的意義と問題点

運動部活動は、「学校において計画される教育活動であり、スポーツ等に興味と関心を持つ同好者が運動部を組織し、より高い水準の技能や記録に挑戦するなかで、スポーツ等の楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動である」（文部省、1999a）とされ、学校教育において重要な位置を占めてきた^{註1)}。子供から大人への移行期にあたる年代において、与えられた練習課題を消化するだけの取り組みから、自分なりの練習方法や目標を模索しつつ、チームや集団の一員としての位置づけを見出す過程は、生徒に多様な側面における成長の機会を提供する。

運動部活動について加賀谷（1998）は、試合での勝利やプレーの楽しさといった、参加者に共通する目的の達成に向けた自己錬磨の機会を通じて、連帯意識や団結心を培い、周囲の人間との円滑な人間関係を営む能力を身につけることができるとしている。また久保（1999）は、指導者による訓練的な活動となる部活動を批判しつつも、生徒が自ら学び、考え、判断し、行動する運動部活動が展開されるならば、自分で課題を見つけ、学習できる個人的な能力を養うことができるとしている。さらに松田（1985）は、スポーツ活動に内在する教育的機能として、ルールやマナーの遵守が求められ、スポーツマンシップやフェアプレーの精神が尊重されること、そして、これらが具体的に身体の動きを通して、繰り返し経験されることによって身に付けられることを指摘している。他方、学校教員の立場からは、運動部活動は「挨拶をする」、「時間を守る」などのような、規範的な行動様式を習得できる場としても認識されているようである（中澤、2005）。

上記の通り、運動部活動には健康や体力の維持・向上のみならず、人間関係の醸成、個人能力の獲得やスポーツマンシップの涵養、規範的行動の習得など、多くの教育的意義が示唆されている。一方で、運動部活動の実施に関しては、以前よりいくつかの運営上、もしくは構造上の問題が指摘されている。

佐伯（1990）は、イギリスにおけるパブリックスクールを例に、禁欲的なハードトレーニングの実践によって人格形成を目指す、運動部活動の問題点を挙げている。ここでは、運動部活動が

スポーツマンシップの涵養を通じて、社会的エリートを養成する機関として機能することから、エリート選抜の裏で忍耐、献身、努力などに劣る弱者が切り捨てられるとしている。また、指導者による管理の程度が強く、訓練的色合いが濃い部活動運営においては、指導者による教え込みや体罰が問題として浮かび上がって来る（久保，1999；植田，1999）。

運動部活動における勝利至上主義についても、厳しい批判が並ぶ。大橋（1995）は、過熱しすぎた運動部活動が、教育の一環としての活動から離れて、学校の宣伝や進学・就職先の確保という経済的活動に組み込まれていると指摘している。文部省体育局体育課（1998a）も「勝利至上主義的な考え方から休日もほとんどなく長時間にわたる活動を子供たちに強制するような一部の在り方は改善を図っていく必要がある」と、運動部活動における勝利至上主義の存在を憂慮し、改善を求めている。

これに対して久保（2002）は、競技スポーツが勝利の追求なくして成立しないことを挙げ、勝利を目指した運動部活動の過熱において批判されるべきは、勝利追求の度合いの強さではなく、何のために勝利追求が計画されるのかという「哲学」の欠如であることを指摘している。さらに続けて、学校教育の一環である運動部活動を通じてアスリートの養成が企図される、という二重空間が存在していることから、「子どもの成長はよい」とする価値に基づく活動は、競技場面において支配的な「勝利はよい」とする価値に基づく活動、に変質する蓋然性が運動部活動にはあると指摘している。そして、同様の問題については古くは丹下（1977）、最近では海老原（2004）、江刺（1997）によっても指摘されており、学校における教育活動にアスリートの養成機関としての役割を担わせたことに端を発する、運動部活動の構造上の問題であると言えよう。

永島（2002）は、運動部員に対するカウンセリング経験から、運動部活動への参加が原因で情緒的に混乱したり、うつ状態に陥ったと考えられる事例が、特別な場合ではないことを明らかにしている。また都筑ら（1984）、高田ら（1985）は、学校不適応を引き起こす要因として部活動経験に注目した研究を実施している。そして、部活動場面における上下関係や、選手選抜、選手間トラブルなどへの対応をきっかけに、心理的問題を発症した事例を紹介している（高田ら，1987）。上述した問題が、こうした事例の発生に至る直接的な原因であるとは言えないまでも、運動部活動の指導現場に少なからず影響を及ぼしていることは否めない。運動部活動が抱える運営上及び構造上の問題は、教育活動としての運動部活動の継続的な実施に疑問を抱かせる。

運動部活動が抱える問題に対して、その改善を目指した取り組みが行われていないわけではない。例えば中塚（2002）は、運動部活動を基盤としつつ、中学から大学まで年代を超えた参加を可能とする地域リーグを創設し、試合に出られない生徒をなくすだけでなく、生徒の志向性やレベルに応じた参加を許容できる体制を、構築した事例について報告している。大竹・上田（2001）は、運動部活動から総合型地域スポーツクラブへと移行した事例を紹介している。そこでは、地域におけるクラブ組織が中心となり、学校教員の他、地域住民から構成される指導の担い手を確保し、青少年期に多様なスポーツに触れる機会を提供することにより、生涯スポーツにつなげる手順について論じている。また、文部省（1999b）も、運動部活動が抱える様々な問題への対処を念頭に、全国で実施されている優れた活動内容を紹介している。これらの先進的、模範的な活動を参考に、学校と生徒、保護者だけでなく、競技団体や地域社会による協力のもと、現状ができる限り改善されることが期待される。

他方、運営上及び構造上の問題が解消されることによって、必ずしも運動部活動の教育的意義

が高まるとは限らない。それは、答えの見えづら問題への対処が、生徒や指導者、そして保護者の人間的成長や、生活の充実に結びつくことも考えられるからである。例えば小谷・中込（2003）は、先に久保（2002）が指摘した学校教育とアスリート養成の二重空間において、指導者が抱える葛藤状況について検討した結果、葛藤を不適応現象としてだけではなく、人間的な成長や発達の契機として捉えることができるとしている。鈴木（2001）は、スポーツ選手が心理的トラブルに直面した際には、その解消よりもトラブル発生の意味を考えるべきであるとしている。そして、因果論的にトラブルの原因を探し、その除去や抑制を図ることは、成長の機会を潰すことにもなるとして、心理的トラブルの成長促進的側面に目を向けるよう主張している。また柳沢（1995）は、学齢期に勝利を目指して努力する過程において、生涯スポーツの実践につながる能力が育成できないはずがない、と述べている。その上で「少々乱暴な言い方をすれば、勝利に向かって努力する過程で現れる諸問題は必然の結果であり、その問題や個性を子どもや集団がいかに消化し、自己認識を高めるかというメタ学力が重要なのである」と指摘している。

文部省が平成9年にまとめた運動部活動の在り方に関する調査研究報告書では、運動部活動への参加に関して、多くの生徒や保護者がスポーツの楽しさを味わったり、体力の向上に役立つだけでなく、人間的な成長を導き、友達づくり、生活の充実に資する活動であると評価していること、さらに生徒、保護者、学校教員のいずれも9割以上が、運動部活動は生徒の現在の生活及び将来に役立つ、と回答したことが記されている（文部省体育局体育課，1998b）。教育現場における関係者は、運動部活動を概ね好意的に捉えていることが理解できる。運動部活動に対する期待や評価に鑑みれば、様々な問題の存在を認めつつ、学校教育の一環としての運動部活動の実施方法を検討するべきであろう。

この検討を進める上で、運動部活動参加者を対象とし、その教育的効果の解明に焦点を当てた研究は不可欠である。しかしこれまで、運動部活動への参加によると考えられる教育的効果、とりわけ人間形成的側面における効果については、経験的に語られることがほとんどであり、具体的な実施方法の検討を可能とするだけの、研究上の成果は見当たらないようである。上述した運動部活動に対する周囲の肯定的評価が、運動部活動に関する研究に真正面から取り組むことに対して、抑制的に働いてきたとも考えられる。どのように運動部活動に参加することによって、如何なる側面における発達が促されるのかについて、明らかにする研究が必要とされている。

2. スポーツ活動への参加による人間形成

運動部活動への参加を通じた人間形成に関する論述は、体育哲学、体育社会学、体育・スポーツ心理学などの領域において、主に行われてきた。特に体育・スポーツ心理学領域では、人間形成を扱う変数として自己概念の他、各種パーソナリティ変数が設定され、スポーツ活動への参加とパーソナリティ変容・形成の関係を扱った実証的研究が、1970年代から80年代にかけて多数実施されている。

Danish et al. (1990) は、スポーツ経験とパーソナリティ形成に関する先行研究をまとめ、スポーツ活動への参加がパーソナリティ形成につながることもあれば、その逆の可能性もあることを指摘している。そして、このような状況であるからこそ、どのようなスポーツ経験を通じてパーソナリティ形成が可能であるのかを理解した上で、パーソナリティ形成に焦点を当てた構成

的な取り組みを実施する必要がある、と述べている。また鈴木・中込(1988)は、スポーツ活動への参加とパーソナリティ変容・形成の関係を扱った研究を広く概観し、スポーツ経験がパーソナリティの変容・形成に、何らかの影響を及ぼしていると考えられるとしている。その上で、このテーマに関する研究の多くが、影響の確認を目的としたものであることを指摘し、スポーツ場面におけるどのような経験が、如何なる心理的側面に影響を及ぼすのかといった、心理的メカニズムの解明に向けた研究の必要性を唱えている。

さらに中込(1993)は、スポーツ経験とパーソナリティの変容・形成の関係について、「対象者ならびにスポーツ経験への直接の統制を施すことが不可能であっても、有効な理論的枠組みに従い、注意深い観察、そして多面的な資料収集、等を通して因果関連性の説明に迫ることができるはずである」と指摘し、エリクソン(1973)が示す生涯発達理論を下敷きに、青年後期における学生スポーツ競技者の同一性形成に注目した研究を実施している。その結果、スポーツ場面における危機(怪我、指導者やチームメイトとの軋轢、活動の継続や引退など)への対処様式が、青年期の発達課題である同一性形成の解決においても繰り返されることを明らかにしている。中込による研究は従来の研究と比較して、スポーツ活動への参加とパーソナリティ変容・形成の関係について、より明確な説明を可能にしたと同時に、大学生を中心とする青年後期において、スポーツ経験がどのように彼らのパーソナリティ発達と関係するのかについて、ライフサイクルの視点から明らかにしたことが特筆される。

しかしその後、スポーツ経験と人間形成の関係についての研究は、実質的な深まりを見せていない。表1は、スポーツ科学分野におけるデータベース(SPORTDiscus)に収録されている研究に関する検索結果である。表に明らかなように、パーソナリティの変容・形成がタイトル等に含まれる研究は、70年代から80年代にかけて盛んに行われていたにもかかわらず、その後は急激に減少している。そして、それと入れ替わるように、心理的スキルに関する研究は、90年代以降非常に多くの研究が実施されるようになってきている。このことは、研究の関心が「スポーツ経験と人間形成の関係」から、スポーツ選手の心理適性やメンタルトレーニング技法に関する研究など「スポーツ選手の心理的競技能力の向上」に向けた研究に、傾いたことと関係しているようである。

以上のように、スポーツ活動への参加と人間形成の関係については、十分明らかにされているとは言えず、運動部活動の具体的な実施方法の検討に結びつく成果が提示されるまでには至っていない。

表1 各キーワードを含む研究数の年代ごとの推移

	年代	1970	1980	1990	2000
検索語	personality development or personality change	20	26	6	6
	psychological skills	0	12	45	40

限定条件：タイトル・キーワード・アブストラクト

(2007年4月現在)

3. 生徒の生涯発達と運動部活動

体育・スポーツ心理学領域では、スポーツ活動への参加と人間形成の関係について、パーソナリティ変数を利用し、スポーツ経験がパーソナリティの変容・形成に及ぼす影響の確認を目的とした研究が、主に行われてきたようである。そのなかで中込（1993）による研究は、スポーツ経験を通じてパーソナリティの変容・形成に至る、心理的メカニズムを説明するものであった。そして、生涯発達理論に基づき、研究対象者である学生スポーツ競技者の発達段階を考慮した変数選択を実施したことにより、スポーツ経験の影響をライフサイクルの視点から捉えることができたと言える。

高橋・波多野（1990）は、これまでの発達心理学において、若者に用いるのと同様の尺度で中高年者の有能さを測定してきたことを挙げ、生涯発達心理学では、人生のそれぞれの時期に応じて「発達をみるものさし」を選択する必要性を指摘している。また、発達心理学が各発達段階における発達の諸相に注目してきたのに対して、生涯発達心理学では、各段階における経験の意味を個人の一生涯のなかで解釈する、各段階において経験・獲得されるべき内容の連続性に注目するなど、ライフサイクルの視点から各発達段階に認められる固有の意味が示される。山本（1992）は「人生前期は人生後期や全生涯との関係において成立しているのであって、発達研究が生涯的文脈で行われるならば、従来の研究成果に対する見方も変わるし、後期の研究も発展するに相違ないと思う。」と述べ、各発達段階もしくは時期における経験をライフサイクルの視点から眺めることの重要性を指摘している。

本研究は、中学・高校における運動部活動を研究対象としている。従って本研究では、彼らの発達段階に応じてスポーツ経験を捉える視点を見直した上で、そこでの経験が彼らの生涯発達において果たす役割について、検討する必要がある。

中学生から高校生にあたる年代は、一般に思春期もしくは青年前期として扱われることが多い。この時期は、第二性徴に伴う身体的変化を契機に親からの独立を試み、物理的に距離を置くものの、同時に未だ強い依存の欲求を持つとされている（神谷，1997）。そして、親からの分離によって生じる孤独感や不安感を抱える彼らにとって、自己の考えに共感してくれる同世代の友人は、未だ危うい自己を保証する存在であり、また互いの比較を通じて、自己の存在を確認するための仲間であるとされている（サリヴァン，1990）。つまり、依存と独立のアンビバレントな感情を抱える生徒にとって、同世代の仲間によって構成される運動部活動は、自己の確立に向けた訓練の場となることが期待される。

加藤・加藤（1988）は青年の自己形成について、その特徴が主体性と能動性にあるとし、その過程は「つくられた性格」から「作りだす性格」への重要な移行であり、他者の意見や判断ではなく、自らの目標や価値などを判断基準として、自らの行いを決定する心理的自立への歩みである、と示唆している。また大野（1988）は青年期について、人間が選択肢としての可能性がある人生から、大人としての人生を選び取っていく過程であり、それに伴って未熟さから成熟へと変化していく時期であるとしている。エリクソン（1973）が示した漸性原理（epigenetic principle）において、青年期に達成されるべき発達課題は同一性の確立であるとされている。それは成人として社会に出て行く上で、「自分ほどのような人生を歩んでいきたいのか」、「どのように生きることが自分にとっての生きがいとなるのか」といった問題に対して、自分なりの回答

を出すべく、取り組むことが求められているからである。そして同様な内容は、他の発達理論においても概ね了解できる。例えば、伝記や自叙伝、臨床面接を通じて得られた資料を生涯発達の視点から分析した Bühler (1968) は、人生目標の決定に関して、青年期にあたる年代を試験的・予備的に人生目標を自己決定する時期、と位置づけている。また、ピアジェ (1960) による認知理論には批判的意見も認められるが (高橋・波多野, 1990)、中学生年代においては形式的操作が可能になり、幅広い視点から相対的な評価が下せたり、より長い展望のもとで判断できるようになるとされており、同一性形成に向けた認知的準備が整う時期であると理解できる。つまり、中学生や高校生には、青年期を通じた発達課題の解決に向けて、まず自らの目標や価値などに基づいて自己決定していく能力を、身につけることが求められている。

生涯発達の視点からすれば、青年期におけるスポーツ活動は、同一性課題の解決に資する活動であることが期待される。しかし岸ら (1987)、鈴木ら (1989)、高見ら (1990) による一連の研究は、スポーツ競技者の同一性形成は、同世代の者と比較して選択・模索経験が少ないことを明らかにし、その原因の一つとして、限定されたスポーツ状況から得られる「スポーツ競技者の同一性」の存在を挙げている。また市村 (1978) は、心理社会的モラトリアムにおけるスポーツ経験を考察し、同一性の獲得に向けた努力や希望を失いかけた青年にとって、スポーツが仮の同一性獲得の機関になりつつあると指摘している。中学生や高校生が自己を定義するにあたり、スポーツ活動は同世代の仲間によって構成される、明確な準拠集団としての機能を果たすと考えられる。但し、そこで開始された同一性の獲得に向けた模索活動が、青年期の終わりを告げる時期に至っても、スポーツという限定された領域から広がることがないのであれば、また、進路選択や人生目標の決定という、困難な課題から逃れるための隠れ蓑となるのであれば、青年期におけるスポーツ経験は、同一性の獲得に消極的に働くと言える。

大学生は、まさに心理社会的モラトリアムにある存在として社会から許容され、様々な役割実験を通じて、自らの同一性形成に取り組むべき段階にあるのに対して、中学生や高校生は、自分なりにやっていけるという感覚を頼りに、社会における自らの立ち位置の決定に向けて、未だ歩み始めたばかりの時期ではある。しかし、そうであるからこそ、中学・高校における運動部活動では、自らの人生を選び取っていく際の手掛かりとなるよう、運動部活動場面における経験を自らの人生や社会との関係から広く捉え、意味づけていく働きかけが必要である。例えば、目標の達成に向かって計画を立てる、さらには練習方法に関する意見を交換するなどの経験は、それぞれ目標設定能力、コミュニケーション能力の獲得につながる経験として、解釈できる。そしてこれらの経験を通して獲得される能力の多くは、運動部活動場面において必要とされるだけでなく、学校生活を含む現在の生活、さらには将来遭遇するライフイベント (人生における重大な出来事) に対処する上で必要とされる能力であるライフスキル (life skills) として、般化可能であると考えられている (Danish et al., 1995)。ライフスキルの獲得を視野に入れた運動部活動を展開することにより、運動部活動における経験の意味を、学校生活や自らの人生との関係のなかで位置づけることができると考えられる。

4. 運動部活動とライフスキルの獲得

スポーツ活動への参加を通じてライフスキルの獲得を目指した研究や実践活動については、上

野（2008）がレビューしており、そこからは北米を中心に盛んに実施されていることが窺われる。WHO（1997）はライフスキルを「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力である」と定義している。そして具体的なスキルとして、意思決定、問題解決、創造的思考、批判的思考、効果的コミュニケーション、対人関係スキル、自己意識、共感性、情動への対処、ストレスへの対処を挙げている。また Danish et al.（1993）は、大学スポーツ選手に対する調査結果をもとに、スポーツ活動への参加を通じて獲得が期待される、多くのライフスキルを例示している（表2）。ここで示されたスキルの多くは、スポーツ場面における具体的な経験と関係していることから、スポーツ場面にはライフスキルの獲得に結びつく経験が内包されていると考えられる。しかし、単にスポーツ活動に参加することによって、自動的にライフスキルが獲得されるわけではない。スポーツ活動への参加を通じてライフスキルの獲得や人間的な成長を目指すのであれば、目的に応じた構成的なスポーツ活動の実施が不可欠であることを、多くの研究者が指摘している（Weiss, 1995; Hodge and Danish, 1999; Mahoney and Stattin, 2000）。

既に北米には、ライフスキルの獲得に注目し、構成的なスポーツ活動を実施するプログラムが存在している（Petitpas et al., 2004; Petlichkoff, 2004; Danish et al., 2002）。しかしその内容が、我が国における運動部活動場面に適用できるのかどうかについては、検討の余地が残されている。筆者らは、諸外国における先行研究や実践活動を参考に、ライフスキルの獲得に焦点を当てた運動部活動の実施方法について、研究を重ねている段階にある（上野・中込, 1998; 上野, 2006, 2007）。

表2 場面を超えて価値を持つライフスキルの例

・プレッシャーに負けない	・自分をコントロールする
・組織の一員となる	・限界に挑戦しようとする
・挑戦する	・自分の限界を知る
・他者とコミュニケーションを取る	・相手を憎むことなく競争する
・成功にも失敗にもうまく対処する	・自分の行動に対して責任を持つ
・他者の価値や信念を受け入れる	・献身的に行動する
・成功するために柔軟に対応する	・学ぶために批判や評価を受け入れる
・我慢する	・自分自身を評価する
・リスクを取る	・うまく意志決定を行う
・一生懸命取り組み、最後まで粘る	・目標を設定し達成する
・勝ち方、負け方を知る	・学ぶことができる
・好きではない人とも一緒に働ける	・システムの中で働ける
・他者を尊重する	・自分でやる気を出せる

5. 運動部活動における生きる力の育成と指導者の役割

生涯発達の視点から眺めた場合、中学生や高校生による運動部活動では、スポーツ技能のみならず、ライフスキルに注目した活動を実施することにより、青年期における発達課題の解決に向けた手掛かりを得ることができると考えられた。そして、ライフスキルに注目した運動部活動の実践を目指した研究が、既に実施されてきている。ライフスキルの獲得に焦点を当てた運動部活動が、これからの学校教育が目指す方向性に対応した活動であるならば、ここで得られる研究成果は、今後の学校教育における運動部活動の意義を示すものとなろう。

中央教育審議会(1996)が「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」に対する第一次答申に示したように、これからの学校教育では、「生きる力」を育むことが目標とされている。答申は、変化が激しく先行き不透明な時代を生き抜く上で、子供たちに必要となるのは、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、さらに、「たくましく生きるための健康や体力」であるとし、これらを生きる力と称するとしている。そして、学校における教育活動である運動部活動は、顧問による適切な支援のもと、生徒主体の活動が実行されることにより、生きる力の育成に大きく貢献できる活動であるとしている(中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議, 1997)。

先に示したライフスキルの定義からすれば、まさにライフスキルは生きる力を構成する、具体的なスキルとして解釈可能である。従って、生きる力の育成を標榜する学校教育において、ライフスキルの獲得に焦点を当てた運動部活動の実践は、学校教育における運動部活動の位置づけをより明確にすると考えられる。

ところで、運動部活動への参加を通じた生きる力の育成には、生徒の主体的な取り組みが不可欠である一方、部活動の状況や生徒からの求めに応じて、指導者が適切な支援を行うことが必要とされている。

藤原(1970)は、青年から見た教師の役割として、年長の賢明な人間で安定感を与える、時には仲間というべきもの、対立者として色々の指導や強制を与えるもの、学習に関する知識を与えるものという、3つの役割を挙げ、教師が強制的で抑制的な立場を取った場合に、青年との間に葛藤が生じやすいとしている。また、平石(1995)は先行研究をもとに、高校生が望んでいる教師像は「信頼してくれる、新しいことを教えてくれる」、嫌いな教師像は「管理的、権威的」であることを示し、生徒は成長しつつある自我を尊重してくれること、評価されることに敏感な気持ちに配慮してくれること、などを求めているとしている。中学生や高校生が親からの独立を試み、自己の確立を目指す過程にあることを考え合わせれば、運動部活動の指導においても、彼らの自己決定を支えつつ、新たな知識や視点を提示するような指導が必要とされる。

内海(1995)が指摘するように、生徒主体の運動部活動ではいかなる能力を身に付けさせるかが重要であり、放任しておいて能力が結果的に獲得されるものではない。指導者による働きかけが担う役割は、決して小さくない。運動部活動は生徒主体の活動であるからこそ、指導者の存在がさらに重要になると言える。

6. おわりに

現在の運動部活動には、運営上及び構造上の問題が認められる。しかし、運動部活動に対して寄せられる積極的な期待や評価に鑑みれば、活動に伴って生じる問題への対処を通じて、生徒のみならず、関係者それぞれが成長する活動として、発展していくことが望まれる。そして、生涯発達の視点から運動部活動を眺めた場合、中学生や高校生による運動部活動は、青年期における発達課題である同一性形成に、きっかけを与える活動となることが期待される。但し、そこで開始された同一性の獲得に向けた模索活動が、青年期の終わりを告げる時期に至っても、スポーツという限定された領域から広がることがないのであれば、また、進路選択や人生目標の決定という、困難な課題から逃れるための隠れ蓑となるのであれば、青年期におけるスポーツ経験は、同一性の獲得に消極的に働くと言える。従って、学校教育の一環としての運動部活動においては、運動部活動経験と社会との連関に対する気づきを促し、生徒自ら、彼らの人生における運動部活動経験の意味を見出せるよう、働きかける必要がある。

ライフスキルに注目した運動部活動は、運動部活動場面における経験を自らの人生や社会との関係から広く捉え、意味づける視点を供給する。指導者による適切な指導のもと、生徒主体の活動が実施されることにより、生徒が自らの人生を選び取っていく際の手がかりを得る活動となりうる。そして、生きる力の育成を標榜する学校教育において、ライフスキルに注目する運動部活動は、まさに学校教育が目指す方向性に合致した活動であると言え、学校教育における運動部活動の位置づけをより明確にすると考えられる。

付 記

本研究は、平成 17-19 年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究(B)：課題番号 17730501）の配分を受けて行われました。

注

注1) 学習指導要領の改訂に伴い、平成 20 年 7 月に示された中学校学習指導要領解説保健体育編では、「運動部の活動は、スポーツに興味と関心をもつ同好の生徒が、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動であるとともに、体力の向上や健康の増進にも極めて効果的な活動である」（文部科学省、2008）と記されている。後段に、体力の向上や健康の増進に対する効果を謳う文言が加筆された他に大きな変更点は見当たらず、学校教育における運動部活動の位置づけや指導方法に関する見解に、変化は認められない。

文 献

Bühler, Ch. (1968) The course of human life as a psychological problem. *Human Development*, 11: 184-200.

- 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議 (1997) 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究報告書.
- 中央教育審議会 (1996) 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について (中央教育審議会審議のまとめ).
- Danish, S.J., Fazio, R.J., Nellen, V.C., and Owens, S.S. (2002) Teaching life skills through sport: Community-based programs to enhance adolescent development. In: Van Raalte, J.L. and Brewer, B.W. (Eds.) Exploring sport and exercise psychology, APA: Washington, DC, pp. 269-288.
- Danish, S.J., Petitpas, A.J., and Hale, B.D. (1990) Sport as a context for developing competence. In: Gullota, T., Adams, G., and Monteymar, R. (Eds.) Developing social competency in adolescence. Sage: Thousand Oaks, CA, Vol3, pp. 169-194.
- Danish, S.J., Petitpas, A.J., and Hale, B.D. (1993) Life development intervention for athletes : Life skills through sports. *The Counseling Psychologist*, 21: 352-385.
- Danish, S.J., Petitpas, A.J., and Hale, B.D. (1995) Psychological interventions : A life development model. In: Murphy, S.M. (Ed.) Sport psychology interventions. Human Kinetics: Champaign, IL, pp. 19-38.
- 海老原修 (2004) スポーツと道徳の狭間にて その 2. *トレーニングジャーナル*, 26 (1) : 70-73.
- エリクソン : 小此木啓吾ほか訳 (1973) 自我同一性 : アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房 : 東京.
- 江刺正吾 (1997) 中等教育における運動部活動の課題. *奈良女子大学・附属学校園間共同研究紀要*, 2 : 16-24.
- 藤原喜悦 (1970) 既成社会との葛藤. 津留宏編 青年心理学. 有斐閣双書 : 東京, pp. 182-206.
- 平石賢二 (1995) 青年期の異世代関係-相互性の視点から. 落合良行・楠見孝編 生涯発達心理学 4 自己への問い直し-青年期. 金子書房 : 東京, pp. 125-154.
- Hodge, K. and Danish, S.J. (1999) Promoting life skills for adolescent males through sport. In: Horne, A. and Kiselica, M. (Eds.) Handbook of counseling boys and adolescent males. Sage: Thousand Oaks, CA, pp. 55-71.
- 市村操一 (1978) モラトリアムとスポーツ的闘争. *新体育*, 48 : 513-517.
- 加賀谷熙彦 (1998) これからの運動部活動の基本的な在り方. *スポーツと健康*, 30 (5) : 7-10.
- 神谷栄治 (1997) 思春期 : 前期-中学生. 馬場禮子・永井徹編 ライフサイクルの臨床心理学. 培風館 : 東京, pp. 75-92.
- 加藤隆勝・加藤厚 (1988) 青年の性格形成. 西平直喜・久世敏雄編 青年心理学ハンドブック. 福村出版 : 東京, pp. 305-325.
- 岸順治・高見和至・中込四郎 (1987) 自我同一性形成における「運動選手としての同一性感」の役割. *スポーツ心理学研究*, 14(1) : 36-41.
- 小谷克彦・中込四郎 (2003) 運動部活動において指導者が遭遇する葛藤の特徴. *スポーツ心理学研究*, 30(1) : 33-46.
- 久保正秋 (1999) 「運動部活動」と「生きる力」. *体育思想研究*, 5 : 125-139.

- 久保正秋 (2002) 「教師」か, 「コーチ」か: 「運動部活動の指導」と「コーチング」の問題点. 体育学研究, 47: 485-490.
- Mahoney, J.L. and Stattin, H. (2000) Leisure activities and adolescent antisocial behavior: The role of structure and social context. *Journal of adolescence*, 23, 113-127.
- 松田岩男 (1985) スポーツを通しての人間形成. 健康と体力, 10: 7-10.
- 文部省 (1999a) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編. 東山書房: 東京.
- 文部省 (1999b) みんなでつくる運動部活動-あなたの部に生かしてみませんか-. 東洋館出版社: 東京.
- 文部省 (2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房: 東京.
- 文部省体育局体育課 (1998a) 運動部活動の現状と推進の方策. スポーツと健康, 30 (5): 19-22.
- 文部省体育局体育課 (1998b) 「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」の概要について. 中等教育資料: 102-106.
- 永島正紀 (2002) スポーツ少年のメンタルサポート-精神科医のカウンセリングノートから-. 講談社: 東京.
- 中込四郎 (1993) 危機と人格形成. 道和書院: 東京.
- 中塚義実 (2002) 補欠ゼロ・引退なしのサッカー部-DUO リーグの実践から-. 体育科教育, 50 (4): 52-56.
- 中澤篤史 (2005) 生徒理解・生徒指導の観点から見た運動部活動と学校教育の結び付き-顧問教師へのインタビュー調査の分析をもとに. トレーニングジャーナル, 27 (5): 46-50.
- 大橋美勝 (1995) スポーツ部活, 今何が問題か. 体育科教育, 43 (5): 14-16.
- 大野久 (1988) 青年期の発達. 久世敏雄編 教育の心理. 名古屋大学出版会: 名古屋, pp. 97-108.
- 大竹弘和・上田幸夫 (2001) 地域スポーツとの「融合」を通じた学校運動部活動の再構成. 日本体育大学紀要, 30 (2): 269-277.
- Petitpas, A.J., Van Raalte, J.L., Cornelius, A.E., and Jones, T. (2004) A life skills development program for high school student-athletes. *The journal of primary prevention*, 24(3), 325-334.
- Petlichkoff, L.M. (2004) Self-regulation skills for children and adolescents. In: Weiss, M. (Ed.) *Developmental sport and exercise psychology: a lifespan perspective*. Fitness Information Technology: Morgantown, WV, pp. 269-288.
- ピアジェ: 波多野完治・滝沢武久訳 (1960) 知能の心理学. みすず書房: 東京.
- 佐伯聰夫 (1990) 生涯スポーツ時代の運動部活動. 体育科教育, 38 (9): 14-17.
- サリヴァン: 中井久夫ほか訳 (1990) 精神医学は対人関係論である. みすず書房: 東京.
- 鈴木壮 (2001) 競技者の心理的トラブルとその予防・対策~カウンセリングを通して見えるもの~. 体育の科学, 51(5): 349-352.
- 鈴木壮・中込四郎 (1988) スポーツ経験による人格変容に関する研究展望. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 12: 59-72.
- 鈴木壮・中込四郎・高見和至 (1989) 運動選手の自我同一性形成の特徴. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 13: 124-135.
- 高橋恵子・波多野誼余夫 (1990) 生涯発達の心理学. 岩波書店: 東京.

- 高見和至・岸順治・中込四郎 (1990) 青年期のスポーツ経験と自我同一性形成の諸相. 体育学研究, 35: 29-39.
- 高田智恵子・田村宏・石淵真理子・藤永隆・下山定利・袖木仁・黒梅恭芳・丹野義彦 (1987) 部活動体験による青年期不適応について-事例検討-. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8: 37-45.
- 高田智恵子・丹野義彦・高田利武 (1985) 青年期の自尊感情と部活動に対する認知との関連. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 6: 29-35.
- 丹下保夫 (1977) 戦後体育史-アマスポーツと学校体育の関係を中心に-. 中村敏雄著 近代スポーツ批判. 三省堂: 東京, pp. 174-192.
- 都筑等・高田知恵子・関谷務 (1984) いわゆる部活動の中学生の精神衛生に与える影響. 群馬大学医療短期大学部紀要, 5: 49-55.
- 上野耕平 (2006) 運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係. 体育学研究, 51: 49-60.
- 上野耕平 (2007) 運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得. 体育学研究, 52: 49-60.
- 上野耕平 (2008) スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得に関する研究展望. 鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要, 4: 65-82.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43: 33-42.
- 植田真紀 (1999) 運動部活動のディスコース研究-体罰問題の視点から-. 中国四国教育学会教育学研究紀要, 45 (1): 289-292.
- 内海和雄 (1995) 生徒が主人公のスポーツ部活. 体育科教育, 43(5): 29-32.
- Weiss, M.R. (1995) Children in sport: An educational model. In: Murphy, S.M. (Ed.) Sport psychology interventions, Human Kinetics: Champaign, IL, pp. 35-69.
- WHO 編: 川畑徹朗ほか監訳 (1997) WHO・ライフスキル教育プログラム. 大修館書店: 東京.
- 山本多喜司 (1992) 人生移行とは何か. 山本多喜司・S・ワップナー編 人生移行の発達心理学. 北大路書房: 京都, pp. 2-24.
- 柳沢和雄 (1995) 学校週5日制とスポーツ部活. 体育科教育, 43(5): 21-24.

(2008年10月7日受理)